

EVの可能性探る 左京でシンポ、技術者らが紹介

電気自動車(EV)と未来の交通システムをテーマにしたシンポジウム「京都研究会～2020年の都市交通」が28日、京都市左京区の市国際交流会館で開かれた。

日産自動車の寺本正彦シニアエンジニアは、同社製EV「リーフ」を開発した背景を交えてEVの可能性を紹介。「自動車の走行時間は1日のうち1・5時間程度。スマートグリッド(次世代送電網)の中にEVを位置付け、駐車中のEVを電気の貯蔵に使うことで限られたエネルギーの効率利用ができる」とした。

太陽光パネルと電気自動車を組み合わせれば、1家庭の電力消費量を賄うことも可能だが、充電池の劣化を防ぐ充放電制御技術などが必要と強調。「エネルギーの有効利用に向け、行政や自動車メーカー、NPOなど社会のあらゆる領域から貢献できることは多い」と述べた。

研究会は、情報通信技術を活用し、持続可能な社会づくりに向けた活動を続けるNPO法人「日本サステナブル・コミュニティ・センター」(京都市上京区)が開催。市民や研究者たち約50人が参加した。



電気自動車の可能性などを紹介したシンポジウム(京都市左京区・市国際交流会館)

【2011年01月28日 22時38分】

Copyright (c) 1996-2010 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd. All rights reserved.

各ページの記事・写真は転用を禁じます。著作権は京都新聞社ならびに一部共同通信社に帰属します

[ネットワーク上の著作権について](#) [新聞・通信社が発信する情報をご利用の皆様](#)
に(日本新聞協会)

[電子メディアおよび関連事業における個人情報の取り扱いについて](#)
記事に対するご意見、ご感想はkpdesk@mb.kyoto-np.co.jp